

この半島が僻地化したのは、実は、明治後半から大正・昭和へかけてのことで、それほど古いことではなかった。恐山でイタコが口寄せすることすらが、ごく近頃のできごとであるのを、原始未開からの習俗のように説いているのも、中央の人たちが、国のはしほしに強いて未開の生活を見ようとしての意識はたらいていてのことにすぎない
—宮本常一

『私の日本地図3 下北半島』2011年、未來社、p.271

波を見ていると、今が、過去と未来にどう繋がっているのかよくわかる
それを繰り返し、ずっと見ていれば、私がどのように命を燃やしているのか——よくわかる
—志賀理江子

ビデオ・インスタレーション《風の吹くとき》(2022-23)収録の言葉より
Tokyo Contemporary Art Award 2021-22受賞記念展「はるか昔の私〜竹内公太、志賀理江子」ハンドアウト

わたしたちは奴隷であることに耐え切れずに負けて、結局のところ暴力をふるう側にまわってしまったのではないかと、とも。わたしが皮膚感覚で《東北》を感じる時、それは決して比喩でなく、そんな気持ちなのです。加害性と被害性を同じ人格のなかに持ちあわせた土地
—山内明美 「わたしは一度も春を見たことがないのかもしれない」姜信子⇨山内明美 『忘却の野に春を想う』2022年、白水社、p.17-18

—山内明美 「わたしは一度も春を見たことがないのかもしれない」姜信子⇨山内明美 『忘却の野に春を想う』2022年、白水社、p.17-18

(ナチラナトラのひいさまは いまみづ底のみかげのうへに 黄いろなかげとおふたりで せつかくをどつて みます いえ けれども すぐでせう まもなく 浮いておいででせう)
—宮沢賢治

『蠅虫舞手』「心象スケッチ 春と修羅」1922年

まあ、ちょっと、いろんなものをさかさまにひっくりかえしてごらん。そうすれば、わかりやすくなる。中が見えるように、自然をさかさまにひっくりかえすのだ。つまり、根を上にするのだ
—K.チャベック

(小松太郎訳)『蘭芸家12か月』1975年、中公文庫、p.142

美術館 堆肥化計画

Museum Composting Project

地域と美術館をつなぐ「堆肥化」
それは下北半島に
新たな血脈を通し、
やがてくる地域の姿を予祝する

旅する ケンビ

耕すケンビ

下北編..脈動する

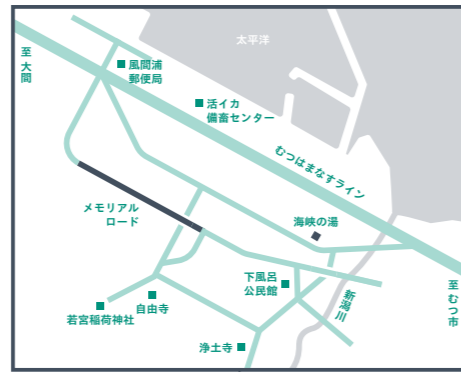
古民家カネシチ+(プラス)

下北郡佐井村佐井字大佐井40
Tel. 0175-38-4108 (株式会社コメイチ)
●JR大湊線「下北駅」から車で約75分 ●下北交通バス「下北駅」バス停から佐井車庫行き「佐井」下車、徒歩約1分 ※バスの本数が限られています。事前に時刻をご確認ください。



大間鉄道メモリアルロード

下北郡風間浦村下風呂字下風呂41 Tel. 0175-35-2111 (風間浦村産業建設課)
●JR大湊線「下北駅」から車で約50分 ※車は近隣の下風呂温泉「海峡の湯」に駐車してください。●下北交通バス「下北駅」バス停から佐井車庫行き「下風呂温泉」下車 ※バスの本数が限られています。事前に時刻をご確認ください。
下風呂温泉「海峡の湯」下北郡風間浦村下風呂字下風呂71-1 ※展示マップ配布場所(予定)
営業時間=【10/31まで】7:00-20:30 / 【11/1から】8:00-20:30 毎月第2・4火曜日定休



尻屋崎公園ビジターハウス

下北郡東通村尻屋ケシ子山37-20
●JR大湊線「下北駅」から車で約40分 ●むつ市内～尻屋をつなぐ予約型タクシーあり(前日15時までに電話予約)→株式会社尻屋観光 0175-28-5554



会場=マエダ本店(むつ市)

営業時間=9:00-21:00 (ただし食料品以外は10:00-20:00)



アート・ユーザー・カンファレンス An Art User Conference (アートコレクティブ)

会場=大間鉄道メモリアルロードとその周辺(風間浦村)



小田 香 (フィルムメーカー/アーティスト)

会場①=尻屋崎公園ビジターハウス(東通村)

会場②=釜臥山展望台(むつ市)

営業時間=①9:00-17:00 ②8:30-21:30

Itazura NUMAN (謎いもの集団)

会場①=マエダ本店内各所

会場②=古民家カネシチ+(佐井村)

営業時間=①9:00-21:00 (但し食料品以外は10:00-20:00) ②9:00-19:00
※9月23日に長福寺(佐井村)、24日に下北文化会館(むつ市)でワークショップを開催。
詳細は「美術館堆肥化計画2023」ウェブページ等をご覧ください

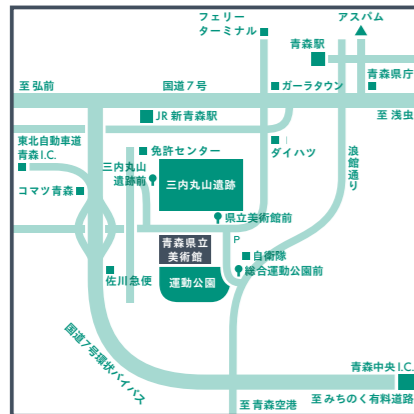


*1 可能世界をテーマにした「フェネラル・ミュージアム」展(おみくじ) *2 撮影=小田香(2023)

2024年2月10日(土) - 6月30日(日) 予定

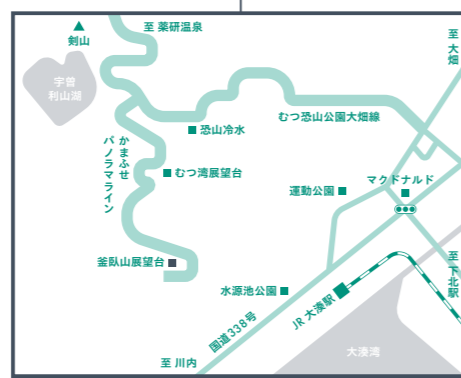
会場=青森県立美術館

開館時間=9:30-17:00 (入館は16:30まで) 休館日=毎月第2、第4日曜日を予定
観覧料=一般510(410)円、高大生300(240)円、小中学生100(80)円
※()内20名以上の団体料金 ※心身に障がいのある方と付添者1名は無料



青森県立美術館(お問合せ先)

青森市安田近野185 Tel. 017-783-3000
●JR新青森駅から車で約10分 ●青森空港から車で約20分 ●東北縦貫自動車道青森I.C.から車で約5分 [八戸方面から]青森自動車道青森中央I.C.から車で約10分
●青森市営バス 青森駅前6番バス停から三内丸山道跡行き「県立美術館前」下車(所要時間約20分) ●ルートバス ねぶたん号 新青森駅東口バス停から「県立美術館前」下車(所要時間約10分)



釜臥山展望台

むつ市大平字荒川山2
●JR大湊線「下北駅」から車で約40分



マエダ本店

むつ市小川町2-4-8
Tel. 0175-22-8333
●JR大湊線「下北駅」から車で約10分

※公共交通機関の運行時刻は変更となる場合があります。※公共交通機関を利用して全会場をめぐるには2〜3日程度かかります。下北半島内ではレンタカー等での移動をお勧めいたします。

主催=青森県立美術館

青森県立美術館

美術館 堆肥化計画

本事業は、青森県立美術館とアーティストが地域と協働することを通じて、地域の魅力を様々な発掘・発信するアートプロジェクトです。そんな美術館発のアート実践を、土壌環境をととのえ作物の成長をささえる「堆肥」になぞらえ、プロジェクト名を「美術館堆肥化計画」としました。

下北半島の生を予祝する

第三弾となる2023年度は下北半島域に出張し、地域の「自然」を取り上げます。太平洋～津軽海峡～陸奥湾に囲まれた「まさかり」「王冠」のような形の下北半島には、1億5000万年前からの日本列島形成の歴史が刻まれています。海と大地の多様なあり方が混ざりあい、渦まくこの地は、そこに住まう人や生きものたちの物心両面に影響し続け、恐山のイタコをはじめとした独特の文化を育んできました。そしてそれらは特に近代以降、「未開の生活」として、中央からの偏見を含む視線にさらされ消費される一面がありました。しかし、そんな視線をも養分として、この地に集い・生きることの意味をアートでもってときほぐし、形にしなおすことはできないか。そうすることで「ここで・あるがまま（自然）に・生きる」感覚を肯定し、下北半島に息づくものたちの、やがてくる生を予祝*すること。そこに「美術館堆肥化計画2023」の目的があります。

*あらかじめ期待する結果を事前に実演することで、その期待が叶うという考えにもとづき行われる、いわゆる「前祝い」の行事。豊作を願う農耕儀礼として行われることが多く、下北半島では東通村大利に事例がある。

まず、ここへ
美術館PR&事業ビジター展示

旅するケンピ

マエダ本店1階のパブリックスペースで事業参加アーティストの下北半島域各エリアでの展開を紹介する展示を行うほか、2階に会場を設けて県立美術館（ケンピ）の建築の一部であるネオンサインや制服、コレクション作品に関する映像や写真を紹介します。



五所川原のショッピングモールELMで開催した「旅するケンピ」(2021)

変容＝堆肥化する美術館

むつ市のマエダ本店を会場にした美術館プロモーション&事業ビジター展示「旅するケンピ」、参加アーティストらによる下北半島域を会場とした現代アート、写真や描画、手芸といった作品の展示やワークショップを展開する「耕すケンピ 下北編：脈動する」といったアート実践。それらを通して美術館を、作品の集まる場所であること以上に、人が生きることをその足元から更新する経験の枠組みへと変容＝堆肥化させようとする「美術館堆肥化計画2023」にご期待ください。

小田 香

下北半島の在来馬である寒立馬を被写体とした作品制作とその展示とおして、「他者と生きること」を私たちが直接経験しなおすための場所をつくりまします。具体的には寒立馬の放牧場所にほど近い尻屋崎公園ビジターハウスで小田が撮影した尻屋崎灯台付近の今の風景写真を展示します。また釜臥山展望台では尻屋崎を遠望できるガラス窓に馬の絵を描き展示し、既存のスピーカーシステムを用いて寒立馬の足音を素材とした音の作品を放送します（各日9:00-17:00）。寒立馬の存在に強く惹かれた小田による今回の取り組みは、私たちが300年続く寒立馬の生を尻屋崎という近くから見ることに／釜臥山という遠くから想像することの間から、他者とともに生きるための「距離」を手さぐる方法としてのイメージ実践といえます。



撮影＝小田香(2023)

おだ・かおり＝イメージと音を介して「人の記憶のありか」「人間とは何か」を探求するフィルムメーカー／アーティスト。1987年大阪府生まれ。米国ホリンス大学教養学部映画コース修了。2016年映画監督タル・ペーラ指揮によるfilm.factory修了（第1期生）。2015年ボスニアの炭鉱を主題とした映画『鉱ARAGANE』(2015)で山形国際ドキュメンタリー映画祭・アジア千波万波部門特別賞受賞。2019年ユカタン半島の洞窟を撮影した映画『セノテ』で2020年大島渚賞受賞、芸術選奨新人賞受賞。映画制作と並行して、カメラを向けた土地や人とのつながりをつつめるための絵画をはじめとした作品制作を行う。主な展示会に「特集 小田香 光をうつして-映画と絵画」(まなびあテラス、フォーラム東根、山形、2021)、「第14回恵比寿映像祭：スペクタクル後 AFTER THE SPECTACLE」(東京都写真美術館 2022)等。https://www.fieldrain.net/

アーティストたちと地域のであい
アート展示等

耕すケンピ

下北編：脈動する

参加アーティスト3組が下北半島域を舞台に作品の制作や展示、ワークショップを開催します。地域に息づく自然や生活文化をヒントに、流動化と混迷の一途をたどる今日の世界を力強く生きなおす場を地域に投企することを試みます。

Itazura NUMAN

Itazura NUMANによる展示とワークショップを、むつ市と佐井村で開催します。役場や地域ゆかりの手芸サークルや作家らとの協働により「タンスの肥やし」になっている古着や布類を収集、それらをリメイクしてできた作品をマエダ本店やカネシチ+既存の要素を組み合わせる形で展示し、作品制作ワークショップを通じて地域に公開・流通させる活動「メダルをサムへ」を展開します。人と人、人と地域社会の関係を結びなおす術や物語を提示しようとするヌーマンの今回の活動は、地域に対する「おせっかい (meddlesome)」じみたものにみえるかもしれません。しかしそんな制作と生活をはみ出し、ませごぜに縫いあわせようとするパワフルかつ、それでいてひそやかな本活動は、下北半島に血を通わせ、ここで「ともに・生きること」を予祝する場につながることでしょう。



下北の手芸サークルや作家たちと出会うヌーマン(2023)

イタズラ・ヌーマン＝「みんなで集まって、話しながら手を動かせる場所があったらいいな」というアイデアをもとに2017年ごろから活動する縫いもの集団。アナキズムとDIYを主なテーマに書籍やzine、グッズを扱うショップ「イレギュラー・リズム・アサイラム」(新宿)に毎週集まり、縫いものしたりしなかつたりしながら活動を継続中。世界のどこかの国々で縫製された安価な衣服が大量に消費廃棄される現状への疑問をもとに、アイデアや方法を集まった人と共有しながら廃棄される寸前の布や服をリメイクしながらファッションを楽しむ活動にも取り組む。主な展示やイベントに「+Itazura NUMAN展」(IRREGULAR RHYTHM ASYLUM, 2018)、「Itazura NUMAN workshop in Studio Parlor!!!」(Studio Parlor, 宮城, 2022)等。https://www.instagram.com/itazuranuman/?hl=ja

An Art User Conference

2021年2022年に引き続き、世界全体をミュージアムとして捉えるプロジェクト「ジェネラル・ミュージアム」の一環として「ジェネラル・ミュージアム | 墓」を展開します。むつ市～風間浦村～大間町にまたがる路線として構想され、戦中の工事中断以降、現在まで遺構が残る「大間鉄道」。その遺構を過去の建造物としてだけでなく、過去における未来(未完成)を宿す遺構として注目し、モニュメント(墓)のあり方を問い直します。具体的には風間浦村の大間鉄道メモリアルロードとその周辺に画像生成AIを用いた抽象的なモニュメントのイメージに「Under Construction 工事中」などの言葉を添えた複数種類の看板を設営します。画像を生成させるためのAIへのプログラムをブラックボックスにし抽象的なイメージを生成させることに加え、さらに複数のイメージを生成させ並列させることで、歴史や地域への解釈を単一的に象徴させるモニュメントではなく、永続的な思索と想像へと投げかけられた多様な「未完成」の形を提示していきます。

https://generalmuseum.wixsite.com/abcd



風間浦村に設置する予定で作成中の、「ジェネラル・ミュージアム | 墓」看板イメージ

アート・ユーザー・カンファレンス＝2014年設立。創作や研究、キュレーションやマネジメント、鑑賞といったアートをめぐる様々な関係者、そしてユーザーの声により運営されるアートコレクティブ。作者や鑑賞者、批評家、キュレーターなどと異なる「user(使い手)」という立場から、既存の芸術概念の問い直しに基づくネオ・コンセプチュアルな作品やアートプロジェクトを展開。主なプロジェクトや展覧会として、アースワークの先駆者である故R.スミッソンを「作者」として「架空に使用」し、作品を展開した「宮城でのアース・プロジェクト-Robert Smithson without Robert Smithson」(風の沢ミュージアム、宮城、2015)。過去と未来の事物を芸術資源として同等に使用する「未来芸術家列伝」。東京都八王子の住宅街に面した森で新たな公共圏＝ミュージアムを構想、実践するべく同時開催されたジェネラル・ミュージアムによるコレクション展「コラージュ、カムフラージュ」+企画展「dis/cover」(2022)等。

総成果展示(仮称)

2023年度コレクション展第4期～2024年度コレクション展第1期の中で開催。秋に地域会場で展開されたアーティストによる制作作品や現地でも出会った作品や資料、ワークショップの内容などを組み合わせ展示するほか、2021年から続く「美術館堆肥化計画」の今日に至る成果を紹介することで、地域にひらかれ、様々な連なりの中で生きることが形になった場所＝堆肥となった県立美術館の姿を展示します。

ご参加の前に最新情報を当館ホームページでご確認ください。

www.aomori-museum.jp

